

岩波
講座

日本文学史 第十二卷 近代

近代詩

石丸久

岩波書店

近代詩

石

丸

久

目 次

一 最初期の翻訳詩と創作詩	三
二 新体詩の成立	七
三 芸術詩の展開	一五
四 象徴詩	二五
五 類唐詩風と口語自由詩	三二
六 民衆詩派と芸術詩派	三三
参考文献	三五

一 最初期の翻訳詩と創作詩

一 翻 訳 詩

わが国で、西洋の詩歌をその原語からともかくも和訳した最初のものは、やはり延享二年（一七四五）に青木昆陽（元禄二年—明和六年）がオランダ語の原詩 *Drunkled* から訳述した「和蘭勸酒歌訳」であると思われるが、これは普通にいう訳詩の体はなしておらず、むしろ一種の解説文句とみるのが穏当である。

表現形態の上から見て和訳詩の名に価する韻文の最も早い出現は、文化二年（一八〇五）に一応の成立を示した稿本「三国祝章」に掲げられたオランダ語の原詩からの邦訳詩に指摘することが今は妥当と考えられる。⁽¹⁾

文化元年（一八〇四）長崎留学中の儒者大槻平泉（清淮）は親族に当る大槻玄沢から故郷仙台藩の当主伊達周宗の祖母年子の還暦を祝う一趣向としてオランダ人にも祝賀の詩を求めこれを献上するように依頼された。彼はまずオランダの軍人バブスト（Franciscus Emilius Baron van Sandick van Pabst）文化元年七月四日から同年十月七日まで長崎滞在に請うてその手に成るオランダ語の詩を得、ついでこの原詩を和蘭通詞馬場貞歴（為八郎）（明和六年—天保九年）（笑）（明和三年—天保九年）・藤原覃（蜀山人大田南畝）（寛延二年—文政六年）らに和訳せしめ、唐通詞劉士永・陸光烈らに漢訳せしめたが、これに志築忠雄の「蘭詩作法」や加茂季鷹の「三翻蘭詩」（長歌）を加え自らは序を草して一卷に編んだ。文化二年十二月一応の成立をみた「三国祝章」はこの稿本に他ならないが、献賀を受くべき藩政の功労者はこの年九月既にして病没したため、この異国情緒もかぐわしい一卷は、予定されていた藤原光貞その他の彩管も揮われることなく未定稿にして已んだのである。西詩和訳の嚆矢は巻中の邦訳詩に見出されるが、「奥州の祖母君六十乃御賀に大槻民

治乃爲に作る」と詞書した貞歴の和解を見るに、「於ウエースタントの柱 国人倚る所の頼み此家を有つの爲めに折れて 天より下りて仙台に住めり善なり健なり国爰に安堵せり太陽循環りて木星五度返り 君が誕生より此賀に至る爾時皆人満悦して祝らく 夫人長生し長生疆りなかれ」というもので、第一句の下に「ウエースタントは国君孤にして幼なき時を云」と割註が施してある。異人の祝意のみならず當時の新知識が盛られ、珍とすべき作物であった。

歴史的にいうと、「三國祝章」の和訳詩につぐ西詩の邦訳は、文政五年（一八二二）から安政五年（一八五八）の間に成立した中島広足（寛政四年—元治元年）の「やよひのうた」や「又同じころの歌」および文久二年（一八六二）頃の訳と思われる勝海舟（文政六年—明治三年）の「思ひやつれし君」などである。通詞猪股久蔭の示唆に成る「やよひの歌」は、「あはれいかに、かくおもしろき、あはれいかに、かくおもしろき、名にしおふ、春のやよひは、いろ／＼の、小草もえ出て、さま／＼の、花も咲きそひ、木々は皆、若葉さしつゝ、のとなる、風吹きわたり、あけまきの、うたふ末野の、ひつじさへ、たかくなり、あはれいかに、かくおもしろき、あはれいかに、かくおもしろき、春のやよひは」というもの、また「思ひやつれし君」は「ローフデンヘルといへる歌もて試にみくに詞になせし」もので、「なにすて、やつれし君ぞ、哀れその、思たわみて、いたづらに、我が世を経めや、あまのはら、ふりさけ見つゝ、あらがねの、土ふみたてゝ、ますら雄の心ふりおこし、清き名を、天に響かし、かぐはしき、道のいさを、天つちの、いや遠ながく、宜く人の、鏡にせむと、我はもよ、思たわまず、おほろかに、此の世を経しと、おもやつれとも」という調子のものであった。明治期に入って、讃美歌も布教の必要から翻訳や創作がなされたが、特にキリスト教禁制の解かれた明治六年（一八七三）頃からは多くの出版も行われた。「改正讃美歌」（明治九年）「讃美歌并樂譜」（同十五年）「附讃基督教聖歌集」（同十七年）「新撰讃美歌」（同二十年）「基督教讃美歌」（同二十九年）などが早く行われたが明治三十六年（一九〇三）の「さんびか」は特に各宗派挙って愛誦する所となった。例えば、「新撰讃美歌」第四の「ゆふぐれしづかにいのりせんとて よのわづらひより しばしのがる」（植村正久訳）という様な調べは、その楽曲と相まって、新旧

1 最初期の翻訳詩と創作詩

の激しい相剋と過渡期における数々の矛盾に心の帰趨を失った当時の青年男女に愛好され、俗世の混乱を逃れた宗教や教育の場において一種の精神主義的 inward 性と、悲哀の快感に溺れる感傷主義とを培っていわゆる明治調と呼ばれる独自の主情的特質を醸成した。仏教における厭離穢土欣求淨土がここでは一層甘美な雰囲気となって空間的異国情緒と時間的永遠思想の裡に醸し出され、対外戦争による国家意識の作興以前数少い青年男女の認められたる交際の場であった教会堂やキリスト教を主義とする学舎において、この傾向にはますます著しいものがあつた。この精神的な感化がやがて社会の諸分野に発現することはいうまでもないが、讃美歌の歌詞は新体詩の一部に影響を及ぼし、その楽曲は小学唱歌その他にも反映するに至った。

新時代の初頭、東洋の後進国が欧米の先進諸国との文明文化の落差を急速に解消すべく新知識摂取の努力をかさねたことはむしろ当然で、それは種々の翻訳にも窺われる。その中、西詩邦訳の上から特に意をとどむべきものに西周(文政二年—明治三〇年
一八二九—一八九七)の訳「(癸毅
氏著)心理学」(明治十一年上巻、翌年下巻)がある。⁽²⁾ヘヴン(Joseph Haven)の *Mental Philosophy, including Intellect, Sensibilities, and Will* のこの翻訳の中で、ホーマー、ミルトン、シェイクスピアその他の詩が紹介・翻訳・翻案され多くは漢詩・短歌の形式によっているが、下巻に「(ヘクスピアール)素士比耳ノ痴狂ノ詩」と題する「ヘンリー四世」からの部分訳があり、これは七五調の新詩形をとって新体詩の先駆的作物とみられる。「剣ヲ杖ニ。松蔭ノ。巖(イワノオサ)撐ヘテ。吐息ツク。時哉見ユル。若武者ハ。是ハ抑軍ノ。使カヤ。見レハ衣ノ。(コノモ)美麗サ。新郎カトモ。訝(アヤ)マタル。」に始まるこの様な訳詩がこの西洋哲学移入の先賢にあつたことは、「新体詩抄」同撰者の一人にして後年麻生義輝の編んだ「西周哲学著作集」(昭和八年岩波書店)に序を寄せた井上哲次郎も早く意識していたといふ。⁽³⁾

注

- 1 岡村千曳「西詩邦訳の濫觴」(『早稲田学報』昭和二十五年九月)
- 2 柳田泉「明治新体詩の先駆—西周の功績—」(『書物展望』昭和八年十二月)

二 創作詩

新時代に入るといよいよ強い自覚と確かな意図をもっていわゆる新体詩の提唱と実践とがなされるに至った。しかしここにはそれ以前からあった創作の新詩形について一瞥する。与謝蕪村（享保元年―天明三年）の「夜半楽」（安永六年）に収められた「春風馬堤曲」「澗河歌」および「北寿老仙をいたむ」等に看られる自由詩形以下、幕末から明治初年にかけては五七調ないし七五調を基本とする一種の新体が創作の韻文に行われた。加藤熙の「一騎歌尽」（嘉永年間）を初めとして、仮に明治四年（一八七二）から四、五年の間に見ても、福沢諭吉の「世界国尽」「小暗誦十詞」、（署名）尾張風土歌」など、啓蒙的な意図を担う暗誦用の実用韻文が続出したが、これらは概ね五音・七音の組合せを基調とする。また、程なく擡頭した自由民権運動においても、思想の宣伝と志気の高揚と同志の団結を図る民権歌の類が在来（蒙）の韻文形式を用いて作られたが、中でも植木枝盛（安政三年―明治二年）の「民権田舎歌」（附録）明治十二年は「自由なるぞや人間のからだ 頭も足も備はりて 心の靈妙万物に越へ 心と身とが俱はるは 一の天地と云ふもよし 自分一人は一人で立つよ なにも不足はないぞいの そこらで人間を自由と申す」に始まる俗語自由詩形を早くも示していたのである。明治十四年十一月から文部省音楽取調掛は「小学唱歌集」の編纂をはじめたが、歌詞には七五調・五七調以外の形式も採られ、楽曲と相俟って種々の効果を顕わした。今に愛誦される「蝶々」「螢」「君が代」「あふげば尊し」等はこの「小学唱歌集」に収められていた。なお明治二十年十二月に編まれた「幼稚園唱歌集」の方には「霞か雲か」「数へ歌」なども載っている。「今夫レ音楽ノ物タル性情ニ本ツキ人心ヲ正シ風化ヲ助クルノ妙アリ」（小学唱歌集）初編の結言として編纂されたこれらの唱歌集は、時として欧米の歌謡や讚美歌の楽曲を借用または模倣しつつ

も穏雅純正の和文脈になる歌詞を具え、新時代の年少者に清純な情操を培い、当時であってはお斬新な興味を惹いたものである。

二 新体詩の成立

一 新体詩の提唱

元和偃武げんなえんぶ(一六一五)以来の惰眠を醒まされて独善退嬰の国際的孤立を鎖国の儉安政策に保ってきたこの国が俄かに西欧先進諸国の主知的合理的近代精神に基く市民社会の趨勢に気がついた時、彼我の間に厳として存在する文明文化の落差を、急速に解消することが識者に課せられた重責となった。福沢諭吉・加藤弘之・中村正直・森有礼・中江兆民・田口卯吉・西周・神田孝平・津田仙・新島襄その他の先覚者による啓蒙運動が、或は学塾の創設に或は著述の出版に或は文化事業の実践に展開される。物質文明においてはともかくも精神文化の面では独得の発達を示し来ったわが国は、衣食住の卑近な文明開化を超えて早くから欧米の学問芸術に関心をもちその移入に努めた。既に触れた西周の「笑較氏著心理学」を初め、チェンバーの百科辞典の一部を訳出した菊地大麓の「修辭及華文」(明治十二年)、来朝中のフエノロッサ(Ernest F. Fenolosa 1853~1908)の講演を翻訳した大森惟中の「美術真説」(同十五年)、ヴェロンの美學書(Eugène Véron: *L'Esthétique*, 1878)を中江兆民が訳述した「維氏美學」(同十六年上巻、翌年下巻。下巻の一部は野村泰亨訳)などがその例である。文物の全般に亘った革新の時潮は、やがて海上胤平の「東京大家十四家集評論」(同十七年)以下の新歌論、坪内逍遙の「小説神髓」(同十八年—翌年)以下の新文学論、二葉亭四迷の「浮雲」(同二十一—二十二年)・山田美妙の「夏木立」(同二十年)以下の新文体をわが国の文学に招来するが、それらに先立って、この国の韻文にむ

しろ新しい一つの分野を創始し確立しようとする試みが既に企てられていた。「新体詩抄」による新体詩の提唱にはかならない。

「新体詩抄」は英・米・仏からの訳詩十四篇に創作詩五篇を併せ序文序言などの散文を加えて明治十五年（一八八二）八月、丸家善七が出版した詞華集である。早く英米に学んで当時流行のダーウィニズムやそれに根ざすスペンサーの進化論哲学を奉じた社会学者、山外山正一（嘉永元年十一月一日—明治三年）（一八四八—一九〇〇）、米国留学を彼と共にしたハックスレー派の植物学者尚今矢田部良吉（嘉永五年—明治三十九年）（一八五二—一八九九）、東京大学に外山の講義を聴いた哲学専攻の巽軒井上哲次郎（安政二年—昭和九年）（一八五五—一九四四）の三学者が近代詩の発足を告げるこのアンソロジーに同撰者となった。井上の回想によれば、初め矢田部・外山が「ハムレット」の主人公の独白を訳して示したが、「矢田部氏の翻訳を見たところが、誠に平易にして分り易く、何だか此の調子でシェークスピアの作を翻訳したならば、世間に始めて西洋の詩の味を味はすることが出来ようと思うたので、是れは面白い、旨く出来て居ると云つて多少讃めたのである。而して幾くも無くそれに圈点を打ち、漢文の評語を加へて、『東洋学芸雑誌』に掲載したのである」といふ。かくて、明治十五年の三月以降『東洋学芸雑誌』の各号に尚今の「ハムレット」（六号）「鎌倉の大仏に詣でて感あり」（九号）「カムアベル氏英国海軍の詩」（十号）、山の「キングスレー作悲歌」（七号）「抜刀隊」（八号）および坪井正五郎の押韻詩「西詩和訳」（九号）などが掲げられたが、アンソロジーの編纂にあたっては更に翻訳詩・創作詩を補充しつつ同撰者の作品のみを収め、井上によって「新体詩抄」と名付けられた。

「夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ」（巽軒）といつて韻文における一種の進化論と自主論を説き、「西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出」（尚今）さんという新時代の先覚者が、この国在来の韻文に満足しえずして、ことさらに「新体詩」の名目を標榜しつつ主張したものは、結局、古来この国の韻文に規範となつてきた用語・形式・題材にわたる急進的な解放であり、むしろ、西洋の

ポエトリイに相当する韻文の新しいジャンルをわが国の文芸の中に創始確立することであった。「和歌ノ長キ者ハ、其体或ハ五七、或ハ七五ナリ、而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ、七五ハ七五ト雖モ、古ノ法則ニ拘ハル者ニアラス、且ツ夫レ此外種々ノ新体ヲ求メント欲ス、故ニ之ヲ新体ト称スルナリ」と凡例にいう。用語については、「新古雅俗の区別なく和漢西洋ごちやまぜで人に分かるが專一」(、山)とし、「我邦人從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルヲ少ナキヲ嘆ジ」(尚今)、「夫泰西之詩。随世而變。故今之詩。用今之語」(異軒)と唱えて、この国の韻文に伝統たる美辞麗句の類に対する意識的な反動から俗辞平語は自由に駆使された。

ダーウインに発する進化論哲学を極めて広汎に展開したスペンサー(Herbert Spencer 1820~1903)の説は明治の啓蒙期に最も歓迎され、その所説は鈴木義宗の「代議政体論」(明治十一年)、尺振八の「教育論」(同十三年)、松島剛の「社会平権論」第一卷(同十四年)、井上勤の「女権新論」(同年)、尾崎行雄の「權利提要」(同十五年)などに訳述移入され、ベンサムやミルの思想と共に、この国の新時代の動向に指導的な理念となった。「新体詩抄」の背景にもまたこの進化論哲学と功利主義の啓蒙思想がある。最もよくそれを反映する作物は、もと乗竹孝太郎の訳述した「社会学之原理」(同年)(H. Spencer: *The Principles of Sociology*)に与える序詩として、山の作った「社会学の原理に題す」や、尚今が朱文公の「少年易老」に拠った「勸学の歌」、また同じ人の「鎌倉の大仏に詣てゝ感あり」等であった。外にしてはクリミヤ戦争・南北戦争・普仏戦役、内にしては西南役などの雰囲気背景とする戦争詩の翻訳や創作も撰ばれたが、山訳「ブルウムフキールド氏兵士帰郷の詩」(Robert Bloomfield (1766~1823): *The Soldier's Home*)、尚今訳「カムプベル氏英国海軍の詩」(Thomas Campbell (1777~1844): *Ye Mariners of England, a Naevel Ode*)、山訳「テニソン氏輕騎隊進撃の詩」(Alfred Tennyson (1809~'92): *The Charge of the Light Brigade*)等々、山作「抜刀隊」等がその類であり、特に、山の創作詩は仏人で軍楽隊の教官であったルルーの作曲を得て明治十八年から軍歌となった。殊に日清戦役に際して続出した軍歌に、これらは先駆するものである。

自然を歌ったものとしては尚今の訳した「シヤール・ドレアン氏春の詩」(Charles d'Orléans (1394~1465): *Sur le Printemps* の英訳 H. W. Longfellow (1807~'82): *Spring*)、また彼が意識して押韻を試みた「春夏秋冬」などがある。人生詠誦の詩には、山訳「ロングフェルロー氏人生の詩」、巽軒訳「玉の緒の歌」があり、原詩は共に Henry W. Longfellow: *A Psalm of Life* であった。山の「高僧ウルゼーの詩」は Shakespeare (1564~1616): *King Henry VIII.* から訳し、尚今の「シェークスピアール氏ハムレット中の一段」と山の「シェークスピアール氏ハムレット中の一段」は共に Shakespeare: *Hamlet, Prince of Denmark* の主人公の独白から訳出されている。

「新体詩抄」収録の作品は、用語措辞に好んで俗語を駆使し、詩想も粗笨な創作が多く、概ね蕪雜で芸術的には劣っていたが、尚今の訳筆にかかる「グレイ氏墳上感懷の詩」(Thomas Gray (1716~'71): *Elegy written in a Country Church-Yard*) はその白眉といえる。「宇宙の事は彼此の別を論ぜず諸共に 規律の無きはあらぬかし 天に懸れる日月や 微かに見ゆる星とても 動くは共に引力と 云へる力のある故ぞ」に始まる「社会学の原理に題す」や、「ながらふべきか但し又 ながらふべきに非るか 爰が思案のしどころぞ 運命いかにつたなきも これに堪ふるが大丈[★]ら夫か 又さはあらで海よりも 深き遺恨に手向ふて 之を晴らすものゝふか どふも心に落ちかねる」と訳し出す「シェークスピアール氏ハムレット中の一段」に比して、「山々かすみいりあひの 鐘はなりつゝ野の牛は 徐に歩み帰り行く 耕へす人もうちつかれ やうやく去りて余ひとり たそがれ時に残りけり」と訳されたグレイの墓碑悲歌は、讚美歌の詞や調と共に明治中葉の感傷的傾向に迎えられつつ、また更にこれを助成した。ハムレット独白の訳は共に蕪雜な俗語に充ちてはいたが、多想寡行の貴公子の苦悩は漸く近代を志向する青年の心を惹き、やがて北村透谷や島崎藤村の芸術に基礎の一つとなって行く。

明治八・九年の交、東京開成学校に英語英文学を講じた英人サマーズ(James Summers)や、その後を承けて明治十年以後、後身校たる東京大学に教鞭を執った米人ホウトン(William Houghton)がチヨウサーやミルトン等と共に

シェイクスピアを教えたことはいうまでもないが、当時の試験問題⁽²⁾から察すると 그레이の悲歌などにも触れていた。当時その教職にあった外山や矢田部、および船越姓を担う学生であった井上らが、やがて新体詩を試みるにあたって外人教授の講義は、西詩の撰択にやはり一つの示唆を与えたものと思われる。サマーズ教授の出題に、“How does poetry act upon education and civilization?” というのがあり、啓蒙期の功利主義思想の反映が窺われる。

生硬にして蕪雑なる作物に観るも、唐突にして穩健を欠く論説に察するも、「新体詩抄」が詩想の閑雅と修辭の典雅に腐心する伝統的な風流韻事の士の響聲を招いたことは想像に難くない。『国民之友』に寄せた「新体詩批評」（明治二十二年一—四月）に、池袋清風（弘化四年—明治三年）は、「詩ニモアラズ、歌ニモアラズ又文章ニモアラズ、而モ其辞拙劣鄙陋ニシテ読ムニ堪エズ」とし、更に「恰モ草木ナキ墓石原ヲ觀ルガ如ク或ハ枯木ヲ植テ作りタル庭園ノ如ク死枯ノ感覺ヲ生ズルガ為ニ忽厭忌ノ頭痛ヲ發セリ」と難じた。新体詩を揶揄する皮肉なバロディーは「吉原の不景氣を詠す」『面白叢談』太平の華第一集（明治二十一年）を初め咄々居士（骨皮道人）の「滑稽新体詩歌」（同二十五年）や正直正太夫（斎藤緑雨）の「新体詩見本」（『二六新報』同二十七年十一月）などに見られよう。

かくて「新体詩抄」の芸術的欠点は自らに不評を招くと共に伝統的な韻文の美を再認識せしめて新韻文論を誘発もしたが、一方に翻訳文学・欧化文学の一翼をも担いつつこの安易な舶来詩法は時好に投じ、少からぬ模倣と亜流を輩出した。例えば韻文論としては、萩野由之の「和歌改良論」（同二十年、小中村義象の「国学改良論」と共に「国学和歌改良論」一巻を成す）、佐佐木弘綱の「長歌改良論」『筆の華』同二十一年九月などのほか、由之の「和歌及び新体詩を論ず」（『東洋学会雑誌』同二十二年十二月）、山田美妙の「日本韻文論」『国民之友』同二十三年十月—翌年十一月、大西操山の「詩歌論一班」（『日本評論』同二十三年十二月）「詩歌論」『青年文学』同二十五年七月、「国詩の形式に就いて」（『早稲田文学』同二十六年十月）、磯貝雲峰の「国詩論」『六合雜誌』同二十五年十一月—翌年一月等が発表され、森鷗外は「美妙斎主人が韻文論」（『志がらみ草紙』同二十四年十月）を以て美妙の偏見を匡した。このような詩論の立論や応酬によって、

歴史的意義はともかく芸術的価値の高く評価されなかった新体詩も次第に芸術的洗練を経ることとなる。

註

- 1 井上哲次郎談・塩田良平記「余と明治文学及び文学者」
- 2 豊田実『『新体詩抄』の背景と反響』（『英文学研究』昭和九年一月）

二 新体詩の実践

形式・用語・題材のすべてにわたって旧来の伝統から解放された所に新体詩は成立した。従って、特殊な教養や詩才を要しない創作上の安易感是一種の好奇心と相俟って新体詩に模倣の続出をもたらし亜流の擡頭を招いた。その代表的なものとして、まず竹内節の編輯による「新体詩歌」（明治十五年—翌年、五卷）および「纂評新体詩選」（同十九年）がある。ここには「新体詩抄」既収の作品が適宜再録されて、諸家による長歌や琴歌などいわゆる新体詩圏外の韻文と併せて掲げられた。このことは、やがて新体詩の概念を拡張して一般に親近感を懐かしめると同時に、この新しい韻文形式による創作の意慾を新時代の青少年に誘発したと思われる。かくて、新体詩は、ともかくも一種の流行となり、それに伴って詩集類の出版・雑誌面への進出・作法書の刊行などを招いたが、青少年の愛誦や参観に備えていわゆる袖珍本の型のものが多く行われた。美妙山田武太郎が、「新体詩選少年姿」（同十九年）に先立って編輯発行した「新体詞選」（同年）、植木枝盛の「自由詞林」（同二十年）、佐藤雄治編輯の「明治新体詩歌選」（同年）等はその主なるものである。なお明治十八年から翌年にかけて発行された『新体詩林』六冊は月刊の詩誌で、その刊行は新体詩流行の一面を物語るといえよう。

「新体詞選」は主として硯友社の機関誌たる『我楽多文庫』から美妙と尾崎紅葉と丸岡九華の新体詩を選び集めたもので、「敵は幾万ありとても、すべて烏合の勢なるぞ。烏合の勢にあらずとも、味方に正しき道理あり。」に始まる

樵耕(美妙)の「戦景大和魂」もはじめこのアンソロジーに収められた。その緒言に、「我邦の文章には、欧州文にある如きパンクチュエーション(句読法)といふものなし。是語法の曖昧なるに、亟ぎて、欠けたる処なり」と述べ、「。」「、」は無論のこと、「、」「||」「……」等の符号を用いる試みを創案実践しているが、これは二葉亭四迷や北村透谷や与謝野鉄幹などより早く、注目に値する。

後年、詞華集「抒情詩」(明治三十年)に収められた「独歩吟」の序文の中で、国木田独歩は述べている——「斯る時、井上外山両博士等の主唱編輯にかゝはる『新体詩抄』出づ。嘲笑は四方より起りき。而も此覚束なき小冊子は草間をくぐりて流るる水の如く、何時の間に山村の校舎にまで普及し、『われは官軍わが敵は』てふ没趣味の軍歌すら到る処の小学校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。又た其のグレーの『チャルチャード』の翻訳の如きは日本に珍らしき清爽高潔なる情想を以てして幾多の少年に吹き込みたり。斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を此小冊子が全国の少年に及ぼしたる事は、当時一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象なりとす」と。また、「而して冷評されつゝも今日まで雑誌類に現はれし新体詩は何時しか世人の眼に慣れて其新詩形も最早奇異ならぬ者となりぬ」と。新体詩の数多い実践の中に、次第に芸術的に価値ある作品も現われきた。訳詩集「於母影」(同二十二年)出現以前の詩壇に、湯浅半月の「十二之石塚」や落合直文の「孝女白菊の歌」等を指摘することができる。新体詩が冷評を浴びた非芸術の試みから奇異ならぬ芸術の楽しみに昇華されて行く過程と段階がここにみられるのである。

半月湯浅吉郎(安政五年—昭和八年
一八五八—一九四三)は「旧約聖書」の「士師紀」に出るエホデを主人公として長篇叙事詩を作り、明治十八年(一八八五)の六月、同志社の卒業式で朗読した後、十月、渡米を目前に控えて出版した。これが「十二之石塚」で、わが国としては近代詩史上最初の個人詩集であった。「古今集」やその系統に連る桂園派の歌道に造詣の深いこの宗教詩人は、西欧の詩想を東洋の温雅な修辭に泌ませている。植村正久は巻頭に寄せた序文の中で、「今や百度更革ノ際文学ノ氣運漸ヤク一変セントスルニ当リ學者往々詠歌ノ事ニ注目シ議論稍喧シカラントス然レトモ或ハ美妙ヲ棄

テ、鄙俗ニ流ル倨然新体詩ト称スルモノ、如キ是レナリ」といい、友人の作物については「余ハ今日ノ如キ茫々タル詠詩ノ沙漠ニ此作アルヲ見テ欣喜措ク能ハサルヲ覺ユ」と推称した。「和歌の浦の磯崎こゆる しら浪のしらぬむかしを 松陰の真砂にふして もとむともかひやなからん 玉津島姫 久かたの天つみそのに むれ遊ぶ聖霊の鳩の錦翼にのらしめたまへ 我神よいざ行て見む」と歌い出るこの詩は、幽邃典雅の美しさをその詩想のみならず格調にも具え朗誦に適う特質を肯かしめるものがある。

「新体詩抄」を撰する以前から井上哲次郎は「漢詩界に一大革新を促さうと努力して居つた」のであって、そのために「袖萩」の詩や「孝女白菊詩」などを作ったという。郷里に赴いて西南戦役の跡を見た記憶に助け成された「孝女白菊詩」は「阿蘇山下荒村晩 夕陽欲沈鳥争返 無辺落木如雨繁 隔水何処鐘声遠」に始まるものであったが、落合直文(文久元年—明治三六年 一八六〇—一九〇三)は「この歌それにならへり」(序)とし、巽軒詩を七五調に歌い替えて「孝女白菊の歌」(『東洋学会雑誌』明治二十一年二月—翌年五月)の長篇叙事詩を成した。「阿蘇の山里秋ふけて ながめさびしき夕まぐれ 一つの寺の鐘ならむ 諸行無常とつけわたる」という流麗温雅の調べはたちまち時人の愛誦するところとなった。この間にドイツ留学から帰国した鷗外は、S・S・S(新声社)を直文らと結び、芸術的翻訳詩の嚆矢「於母影」の訳業を成したが、国文の名手直文はここでも純正な修辭の才識を以てその任を果たしたことを思われる。

註

1 井上哲次郎談・塩田良平記「余と明治文学及び文学者」

2 この漢詩と新体詩は明治三十七年九月以降しばしば版を重ねた井上哲次郎著『日本学生宝鑑』(大倉書店刊)にも併せ掲げられた。

三 芸術詩の展開

一 芸術的訳詩群の出現

明治二十二年(一八八九)八月十三日発行の『国民之友』第五八号の夏期附録として、饗庭篁村の「良夜」、森田思軒の「消夏漫筆」、北邨散士(嵯峨の屋お室)の「流転」などと共に「藻塩草」に編まれその劈頭を飾ったものこそ、この国最初の芸術的訳詩群「於母影」に他ならない。所載誌の四五頁から六〇頁までを占めるその巻頭に、ハイネの *Buch der Lieder* 古版豪華本所掲の口絵に示唆を得て、これを日本化したと思われる童児遊樂の図と、万葉の古歌「陸奥のまのゝかや原とはけどもおもかげにして見ゆとふものを」、蘇東坡の詞句「岷峨天一方雲月在我側」を掲げている。S・S・S 同人の手に成る訳詩十七、レナウ(列脳)(Nikolaus Lenau 1802~'50)、『ギョウテ(Johann W. von Goethe 1749~1832)』『ヴォールマン(我爾曼)(Karl Woermann 1844~1933)』『シモン・フェル(色弗祿)(Joseph V. Scheffel 1826~'86)』『ハイネ(Heinrich Heine 1797~1856)』『ザロック(Karl Gerok 1815~'90)』『ケルネン(Justinus Kerner 1786~1862)』『ホントン(Ernst T. A. Hoffmann 1776~1822)』『フェルランズ(Ferrand 1813~'42)』等ドイツ詩人の原作が多く、それにそれぞれハイネ、シェレーゲル(August W. von Schlegel 1767~1845)による独訳を通してバイロン(拜倫)(George G. Byron 1788~1824)、『シェクスピアの作品も和訳ないし漢訳されている。明の高青邱の「野梅」は和訳され、わが「平家物語」の一節は漢訳されて「鬼界島」となった。「藻塩草」のタイトル・ページに掲げられた「於母影」の目次をみると、各々の訳詩の題名に註記して(意)(句)(韻)(調)の別が設けられている。(意)は「従原作之意義者」、(句)は「従原作之意義及字句者」、(韻)は「従原作之意義及韻法者」、(調)は「従原作之意義字句及平仄韻

法者」である。翻訳態度の多様性をこのように公開したところに窺われるものは、彼らが在来の訳詩に対する批判と独自の芸術的主張と、科学的な分類意識と、積極的な実験意欲などである。原詩の選択に反映した浪漫的嗜好や訳詩の修辭にあらわれた古典的な傾向と相まって、それこそこの渺たる訳詩集に豊かな特色をつけ加えることとなった。

明治二十一年九月八日、青春四年の哀歎をつくして欧州留学から帰国した森鷗外は、その翌年民友社の依頼によって訳詩集を編むこととなり、落合直文、市村瓊次郎（明治元年—昭和三年）、井上通泰（慶応二年—昭和六年）等の友人、および妹にあたる小金井きみ子（明治四年—昭和三年）ら S・S・S 同人五人のメンバーで主として鷗外の所蔵本により、協同作業としてこれは行われたのである。後、鷗外はこの労作について、「何の方鍼もなく取りて、何の次第もなく集めたるものなれど、社中の人々がしのばずの池に臨める楼上に夜を徹して、此一巻を編み成し、時を憶ひ起せば、毎篇毎関毎句毎字、一として深き感慨の媒ならぬはなし」と「水沫集」改訂版（明治三十九年）の序に記したが、きみ子もまた「鷗外の思ひ出」（昭和三十一年）に収めた「花園町の家」の一節に、「其頃西洋の詩を訳して『国民之友』へ寄せることになつて、お兄様が文字と意味とをいつて、それぞれにお頼みになります。中には意味だけいつて、お自由にと仰しやるものもありました」と述べて、西詩を鑑賞しつつ翻訳の芸に興ずる一座の雰囲氣を伝えている。芸術的な訳詩の数々はこのようにしてこそ初めて成ったのであらう。

遙かなる西欧詩歌のおもかげは新帰朝者鷗外を懸橋としてここに移され、次第に当代青年の好む所となつてその影響は單に詩歌や文芸一般に止まらず彼らの嗜好に一つの方向を与えるに至った。明治女学校の学生達や『文学界』の人々が特にシェイクスピアの「ハムレット」に出てくる「オフエリヤの歌」を愛誦したことを小説「春」（明治四十一年）や「桜の実の熟する時」（大正三十八年）に描いた島崎藤村は、「春」に英語原詩を『文学界』第八号表紙裏に掲載された時のように間のせりふを除いて掲げた後「於母影」の訳を附している（但し「於母影」所収の訳は A・W・シュレーゲルの独訳からの重訳）。